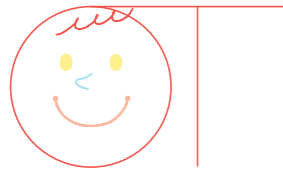


毎日と、
未来と、
つなぐ。



発達期の支援を専門とする作業療法士は、
保育や教育、医療、療育の現場など、
地域の身近な場所にいます。お気軽にご相談ください。

一般社団法人 日本作業療法士協会 または
各都道府県の 作業療法士会 まで

一般社団法人 日本作業療法士協会
東京都台東区寿 1-5-9 盛光伸光ビル7階 TEL.03-5826-7871 FAX.03-5826-7872
www.jaot.or.jp

子どもの
育ちを支える
作業療法士

一般社団法人
日本作業療法士協会
Japanese Association of Occupational Therapists

かな?
かな?
かな?

子どものせかいと
目線をつなぐ。

作業療法士は、
育ちを支える専門職。

自分のからだの大きさをわかっていないんじゃないかな? 同時に2つの音がしていると、頭のなかでごちゃごちゃになるのかな? ああかな? こうかな? 子どものなかで起こっている世界を理解し、推測するには、医学的な知識や専門的な経験がないとできないことがあります。目に見えづらい、伝わりにくい障害の背景を説明し、子どもが感じていることをお母さん、お父さんが理解し、同じ目線で見られるようにつなげます。

作業療法士は、国家資格をもったリハビリテーションの専門職。生理学・運動学といった医学的知識、育ちに関する発達心理学の知識、子どもたちを社会や人のつながりに参加できるようにする作業科学の視点などをもって、育ちと生活を手助けします。



子どもが何を伝えたいのかわからないことに、戸惑っているお母さん、お父さん。感情を表現することやからだを動かすことがうまくできず、伝えられないことがたくさんあり、理解をしてもらえずに困っている子ども。

どんなことを伝えたいのか、どんなことに困っているのか、私たち作業療法士は子どものからだの動き、感覚の受け取り方、言葉の理解の仕方、人や物との関わり方を観察。得意なことを引き出しながら、一人ひとりに合わせた支援を行います。

子どもが安心して遊び、学び、くらしているように。お母さん、お父さんにも安心して笑顔で、子どものところからだを喜んでいけるように。作業療法士は子どもの成長へとつなぐ手助けをします。

つなぐ

まわりのいろんな音が嫌いな子。
虫のことがすごく好きな子。
書けなくても、たくさん文字を読むのが得意な子。
からだを動かすことは難しくても気持ちは活発な子など、子どもたちは一人ひとり違います。

子どもへの作業療法は一緒に遊ぶだけのようには思われがちですが、そうではありません。

どんな動きが好きか、どんな状況が嫌で混乱してしまうのかなど、子どもの状態に合わせてどの遊びが発達によいか、生活動作などと組み合わせたりして行います。

多種多様な作業療法プログラムで、子どもが「やってみたい!」とチャレンジする気持ちを応援し、「できた!」という自信を積み重ね、のびのびとその子らしく生活できるようにつなげます。

遊びのなかの作業療法

運動・知的機能、情緒や社会性を、遊びのなかで育みます。トランポリンやトンネルといった感覚運動の遊び、パズルや積み木などの構成遊び、仲間と一緒にやるおにごっこなどの社会的遊びがあります。

学びのなかの作業療法

学習や学校生活の土台となる力を育みます。姿勢を保つ、道具を使う、複数のことの手順を組み立てる(時間内に帰りの用意をする)、2つのことを同時にする(先生の話聞きながらノートを取る)練習などを行います。

くらしのなかの作業療法

食事、排泄、着替え、入浴などの生活動作を安定して行えるようからだをうまく使う力、さらには、思いを伝え合う、好きなことを見つけたら、失敗から立ち直るなど、社会で人と関わりながら生きていく力を育みます。

ひとつひとつゆっくりと。チャレンジする気持ちとつなぐ。

くらす

あ、これ、おいしい。

学ぶ

僕の困ってたこと、
わかってもらえた。

遊ぶ

一緒にトランプしようよ。

たくさんある「できた!」のほんの一例をご紹介します。

子どもと 作業療法

どんなことを育むの?

子どもの成長とつなぐ、 作業療法士がいます。

大人と違って子どもの作業は「遊び」と「学び」の領域が中心になります。からだを動かすこと、周りで起きていることを理解すること、道具をうまく使うこと、自分の気持ちを表現すること、友だちと協力することなど、子ども一人ひとりの状態に合わせた活動でアプローチし、成功体験を積み重ね、発達を促します。

できるようになるというだけでなく、人と関わりながら、自分自身で考え、将来、自立して生活していくことを促します。

いつも下を向いていてお顔が見えない。

脳性麻痺のある5歳の女の子。車いすではからだ
が二つ折りの姿勢になって顔も見えず、話すこと
は聞き取りにくい状態。家では一人でアニメを
見るようになっていました。



できたへ手助け

目と手、空間知覚の練習を計画しているときに、女の子が机の上のトランプを気にしていることに作業療法士が気付きました。もしトランプができれば他の子どもたちとも遊べるようになると、早速、トランプを用いるプログラムに。すると2カ月の間に、女の子の目と手の機能はぐんぐんと成長。車いすに座って前を向き、一枚ずつカードをめくって、他の子どもたち、家ではパパやママともお話ししながら楽しむようになりました。

作業療法士が育むこと

遊びは五感やバランス感覚、外部の環境との関わり、感情の揺れ動きなど、生きる力を育むことにつながります。楽しく元気に遊ぶだけでなく、作業療法士は子どもの状態を評価し、どの遊びが子どもの発達を促すためによいかを選び、組み合わせます。

授業中に離席して立ち歩いてしまう。

ADHD(注意欠陥・多動性障害)の診断がある小学
4年生の男の子。授業中に離席して立ち歩いたり、
気ままに発言をしてしまうことが多くあり、本人に
とっても周りの児童にとってもよくない状況だと
先生から相談がありました。



できたへ手助け

作業療法士が授業を参観してみると、男の子は、定規を使って線を引いたり、ノートを押さえて消しゴムを使うといった、両手を使う(両手協調動作)時に苦勞していました。姿勢も崩れています。離席などの背景にはこのことのあるのではないかと声かけのポイントを先生に伝え、机と椅子の高さも調整しました。先生がその視点で配慮、声かけをするようになると離席や暴言は減ってきました。

作業療法士が育むこと

学習の土台となる目のコントロール、姿勢の保持、量感がわかるなどの力や、疑問をもつ力、じっくり考える力、周りを参考にする力、道具をうまく扱う力などに着目します。これらを通して学ぶ楽しさを味わい、成長する自分を見つけることを支えます。

泣いてぜんぜん食べてくれない。

早産児で運動発達に遅れがある1歳の女の子。
食事が嫌いで、椅子に座らされると思うと泣き
叫び、離乳食も進まず、このままでは保育所にも
長時間預けられないとお母さんは悩んでいました。



できたへ手助け

女の子には斜視があり、対象物をうまくつかめていない様子。華奢でお尻が薄く、触ることに過敏。嫌だと感じると気持ちが立ち直りにくい。そこで座面の硬い椅子ではなく、作業療法士の膝の上で食べることに。食べ物口元に運ぶときも「あーん」などと言わず、ゆったり食べ物を観察できるようにすると、次第に警戒心が解けていきました。この方法をお母さんにも家で続けてもらおうと、食べられるものも増え、椅子に座ってでも食べられるようになりました。

作業療法士が育むこと

苦手な動作がやりやすくなる環境を整え、できる方法を工夫して見つけ、積み重ねることで、本人が自信をもってやれるように育みます。それを保護者とも共有し、保護者の方も育児での達成感を感じられることを目指します。